大学生のスポーツ組織継続の動機と目標志向性に関する研究

Research on Motive of sports organization continuance and Target intentionality of University student

1K05B111　　芝本　達哉
指導教員　　主査　木村和彦先生　　副査　作野誠一先生

【研究の目的】

現在大学生のスポーツへの参加は競技志向だけでなく幅広いニーズを満たすサークル志向が強く、競技志向を主眼に置く体育会の衰退が叫ばれている。大学生の運動部活動への加入状況は 19.4%で中学生（65.4％）、高校生（50.9％）と比べ低い。また、大学生のスポーツ組織参加・継続の動機は様々に多様化しており、これまでのスポーツに対する価値基準では測りきれない複雑な様相を呈している。大学生時代の充実したスポーツ経験が以後のスポーツ観に影響すると考えられ、生涯スポーツを振興する上でも、大学生のスポーツ参加者の継続動機に関して検討することは非常に重要である。本研究はこうした考え方に基づき、特に継続動機と目標志向性に焦点を当て、二つの構造を明らかとすることで、部活動及びサークルの指導や運営を潤滑にするための課題を示唆することを目的とする。

【研究方法】

質問項目：基本属性について、性別、所属、学年、年齢、役職、競技年数を質問項目として設定した。また部活動・サークルの継続動機、目標志向性を規定する要因として、先行研究を参考にそれぞれ 25 項目と 18 項目を設定した。この継続動機、目標志向性と基本属性との関連を分析し、また、目標志向性が各継続動機に与える影響を調べた。

① 調査対象：スポーツ科学部生で部活動やサークルに所属する学生98名（男子61名女子37名）を対象として調査を行った。

② 場所：早稲田大学東伏見キャンパス教場

【結果】

継続動機 25 項目の因子分析の結果、6因子が抽出され、回避、成長、親和、自由平等、健康体力、固執と命名した。また、目標志向性 18 項目の因子分析の結果、2因子が抽出され、成績目標、熟達目標と命名した。部活動・サークル間で因子得点の平均の差の検定を行ったところ回避、成長、固執、成績目標では、部活動の平均値が高く、自由平等についてはサークルの平均値が高いという結果が出た。次に性別で因子得点の平均の差の検定を行ったところ、男子の方が高いものは、成長、健康体力、成績目標、反対に女子が高い値を示したものは固執であった。競技年数、年齢、各継続動機、各目標志向性について相関分析を行ったところ、競技年数と自由平等因子の間と年齢と成長因子の間に負の相関が見られた。目標志向性が各継続動機に与える影響を見るために、継続動機因子得点を従属変数、目標志向性因子得点を独立変数に入れ、回帰分析を行った、回避の動機に成績目標と熟達目標がともに影響を与えていた。また、成長の動機には成績目標が正の影響を与えており、熟達目標が負の影響を与えていた。

【考察とまとめ】

基本属性と各動機各目標志向性の関連を調べた結果から、部活動やサークル、性別、競技年数や年齢を考慮に入れて、監督や指導者は部の雰囲気や運営を行う必要があることが示唆された。

目標志向性が両方とも高いものが、回避の動機も高いという結果から、2つの目標志向性が高いことへの問題も示唆された。成長動機に成績目標が正の関連、熟達目標が負の関連を示していることから、成績目標が高いことの重要性も示唆されている。

【研究の課題】

本研究では時間の制約により、スポーツ科学部生にしぼり、調査場所もひとつの授業でサンプルを取った。こうした結果サンプルに偏りが出て、偏った結果が出てしまった可能性がある。また、競技種目を絞っていないため、チームの方針や、大学教授やそれぞれのチームや指導者の価値観といった要因やまたはチームスポーツであるか個人スポーツであるかといった要因も無視することとなった。今後、複数の大学を対象とした調査や、種目をしぼった調査、または小学生、中学生、高校生、大学生の学習時期による差などを検証することは今後の重要な課題である。